

相づちのタイミングにおける中日の比較

——異なる会話場面での相づちの先行発話に対する分析を通して——

楊 晶*

A Comparison between Chinese and Japanese in the timing of “Aizuchi”

YANG Jing

摘 要

本文試就中国人と日本人在谈话过程中何时作出听话人的反应进行对比。对谈话语料进行定量与定性分析的结果表明，汉语母语交谈者多在句子结束的时候作出某种反应，这种反应不是针对某种特定的语言形式所发，而是与话语内容有着密切的联系。而日语母语交谈者做出的听话人的反应多发生在若干特定的语言形式之后，这些语言形式在一定程度上受到交谈者之间的关系及谈话语体的影响。

对于两国语言中出现的上述差异，笔者通过考证认为是由中日两国在语言结构上存在的差异以及在与他人谈话时的语言意识和习惯之不同所导致。希望本研究成果能对研究和开发有效的汉语及日语会话教学法有所启示，并对理解异文化、培养和提高跨文化交际能力起到帮助作用。

关键词：听话人的反应，何时作出听话人的反应，话语内容，特定的语言形式，谈话场合

1. はじめに

相づちは会話をする際の聞き手側の反応の一つとして、会話の進行過程において重要な役割を果たしている。しかし、言語が違うと相づち使用に関する習慣等が異なるため、外国語学習者にとっては、相づちの習得は決して容易ではない。中国人日本語学習者の日本語会話における相づちの使用箇所が母語話者と異なっているという報告（楊1997）や、日本人中国語学習者による「中国人の（中国語による）話を聴いている時、相づちをいつ、どこで打てば良いかは分からない」といったコメントなどもこのことを裏付けていると言えよう。そこで、中日接触場面でのコミュニケーションが円滑に行えるように、文化的背景が異なる中日両言語の学習者においては、相づちのタイミングの面における相互の差異を認識しておく必要があると考える。

日本語の相づちはそれぞれの談話においてダイナミックに変化し、会話の場面（フォーマル／インフォーマル）、会話の内容（深刻／気楽）、会話の目的（用件あり／親睦目的）、会話の参加者の人間関係（親疎、上下）や年齢、性別等と大きく関連しているという指摘（堀口1997）から、相づちのタイミングもこうした条件に影響を受け変化が生じうると考えられる。例えば、日本人は、会話参加者の人間関係等によって異なる文体を使い分ける。そのため、改まった場面で会話する時に比べて、親しい人との雑談などでは、終助詞や間投助詞が多く使用されることから、相づちの先行発話（相づちが打たれる直前の発話）の形式には一定の違いがあることが予測される。しかし、これまでの相づちのタイミングについての研究では、先行発話の形式が会話参加者の人間関係や会話場面等から影響を受けるという前提から相づちのタイミングの変化を論じているものは少ない。従って、相づちの

キーワード：相づち、相づちのタイミング、発話内容、定型的な形式、会話場面

*平成9年度生 比較文化学専攻

全体像を明らかにしようとする際、データの収集から分析の手法まで統一した基準で複数場面での会話を分析し、相づちのタイミングに変化がないか否かについて調査する必要があると考える。そこで、本研究の目的を以下のように設定した。

中日両言語の相づちのタイミングの実態を分析し、相づちのタイミングのそれぞれの特徴及び両言語間の相違点を明らかにする。更に、相違の生じた背景について考察を試みる。

中日両言語の相づちのタイミングの特徴や相違点を明らかにすることにより、中国語教育及び日本語教育における相づち指導、中日接触場面における相互理解への示唆を得られると考える。

2. 研究方法

2.1 分析資料

会話場面には様々なものがあるが、研究目的を達成するために、両言語とも日常生活において発生しがちと考えられる面識のない人との対面会話及び知人や友人との電話会話をデータとして調べることにした。以下の3場面の会話である。

- ①フォーマルな場面として、面識がない者同士2名による情報収集を目的とする対面会話（両言語各2組）。
- ②インフォーマルな場面として、知人同士2名による用件の依頼を目的とする電話会話（両言語各2組）。
- ③インフォーマルな場面において友人同士2名による雑談内容の電話会話（両言語各1組）。

上記データ①は、実験的な手法で採集したものである。実験は次のように実施した。語学クラスに関する情報提供を求める場面を設定し、被験者に、事務員役の人に、語学クラスの開講時期、費用、先生及び受講生の状況等について教えてもらうようにとロールプレーを依頼した。聞き手の相づち使用が、話し手側の発話速度や口調などに大きく影響されることを考慮し、情報提供をする事務員役（話し手）を言語別に各1名に固定した（日本語会話はJ1、中国語会話はC1）。各被験者と事務員役の人との会話を録画・録音したものを分析資料に用いた。一方、データ②と③は自然会話を録音したものである。

個々の会話の長さは約3分～22分と様々であるが、各会話からそれぞれ約4分間を取り出して分析に用いた¹。データはすべて日本で採集しており、会話参加者は全員女性である。分析資料の概要は表1に示す。なお、A～オは会話の番号を示すものであり、CーA～Cーオは中国語母語話者同士による会話、JーA～Jーオは日本語母語話者同士による会話である。C1～C9は中国語会話の参加者であり、J1～J9は日本語会話の参加者である。会話時間は分析対象とした時間である。

表1. 分析資料の概要

会話番号	会話内容	会話者	会話者関係・会話場面	会話時間
CーA Cーイ (情報提供)	C1が北京の大学における各種中国語学習コースに関する情報をC2とC3に対して提供する。	C1 / C2 C1 / C3	初対面・ フォーマル	約4分 約4分
Cーウ Cーエ (依頼)	ウではC4が留学生の受入れ先探しをC5に依頼し、エではC6がC7に被調査者探しを依頼する。	C4 / C5 C6 / C7	知人・ インフォーマル	約4分 約4分
Cーオ (雑談)	C8の現在の体調、お互いの健康を保つ方法について話す。	C8 / C9	友人・ インフォーマル	約4分 約4分
JーA Jーイ (情報提供)	J1が日本語学校に関する情報をJ2とJ3に対して提供する。	J1 / J2 J1 / J3	初対面・ フォーマル	約4分 約4分
Jーウ Jーエ (依頼)	ウではJ4が被調査者探しをJ5に依頼し、エではJ6がワーブ原稿の変更をJ7に依頼する。	J4 / J5 J6 / J7	知人・ インフォーマル	約4分 約2.5分
Jーオ (雑談)	子供の卒業式を記念して親子の食事会の日程を決めた経緯を話す。	J8 / J9	友人・ インフォーマル	約4分

2.2 分析方法

会話アとイは、それぞれ同一人物（中国語会話ではC1、日本語会話ではJ1）が情報提供を求められるものであり、情報を求める側が主に聞き手役を担っている。会話ウとエにおいても、それぞれ電話を受ける側（依頼される方）が主な聞き手となっている。よって、この2場面計8組の会話については、主な聞き手となっている人（両言語各4名）の相づちⁱⁱ及びその先行発話を分析することにする。会話オは雑談であり、情報提供を求める会話アとイ及び用件の依頼を目的とする会話ウとエに比べて、会話参加者双方が聞き手役と話し手役を交替することが比較的多い。そのため、この場面については双方の会話参加者（両言語各2名）の相づちとその先行発話を分析することにする。

中国語の相づちについては、主に文が終了したところに使用されるとされている（劉 1987、ClanCy 他 1996）。この指摘から、中国語会話においては相づちがまとまった意味を持つ「文」という文法単位に対して多数使用されることが予想された。そこで、相づちのタイミングを分析するに際し、その先行発話に対して、「文」ⁱⁱⁱを単位とし、本研究では主に文の終了したところ（以下「文末」と記す）に限定して調べることにする。一方、日本語の相づちが打たれるタイミングについては、文法形式による統語的なもの、先行発話のイントネーションやポーズ等による音声的なもの、対面会話の場合は話し手のうなずきという非言語的なものなどが挙げられている（メイナード 1987、水谷 1988、杉藤 1993、今石 1994 等）。本研究では、主に統語的要素に着目し、先行発話の文法的形式について分析することで相づちのタイミングを調べることにする。

本稿で使用する分析資料の文字化記号は以下の通りである。

① ハイ 下線が付いたものは相づち。その前の番号は事例に取り上げられている相づちの通し番号

① 文頭に付いた網掛けの数字は各事例に出ている文の通し番号

けれど 網掛けの部分は特に注目すべき相づちの先行発話の形式を示している

啊— 「—」は長めに発音されていることを示している

、 会話において、発話中に出ている短いポーズ

。 中国語会話における意味的な完了

↑ 上昇調イントネーションで発音されていることを示している

×× 聞き取り不能な箇所

@@ 笑い（相づちの機能を持っており、相づちに含まれる）

3. 分析結果

3.1 中国語会話における相づちのタイミング

表2は、2.2で述べた方法で中国語会話に現われている相づちを分類し分析した結果を個人別にまとめたものである。

表2. 中国語会話における文末の相づちの割合

会話番号	分析対象者	相づちの総数 (文末の相づち数)	文末の相づちが相づちの 総数に占める割合
C-ア	C 2	25 (19)	76.0%
C-イ	C 3	24 (18)	75.0%
C-ウ	C 5	18 (14)	77.8%
C-エ	C 7	25 (20)	80.0%
C-オ	C 8	23 (17)	73.9%
	C 9	11 (8)	72.7%

表2によれば、中国語会話については、6名の分析対象者による相づちのうち、7割～8割（72.7%～80.0%）が文末に集中しており、その割合は会話の場面による差や個人差も小さい。この結果は、劉（1987）及びClanCy

他(1996)の中国語の相づちが主に文末に対応して使用されるという先行研究を支持するものである。しかし、詳細に見ると全ての文末に相づちが打たれているわけではなく、複数の文が言い終わった時点で相づちが打たれていることも多い。分析資料から事例を見ることにする。

〈事例1〉(会話C-オより)健康の重要性や健康法について話している。日本語訳は筆者による。以下同。

C9: ①自己调节呗。②现在我觉得,能靠得住的就是自己的身体了。

①自分で調節するしかないですね。②自分の体だけが頼りになると思いますけど。

① C8: 对对对

ソウソウソウ

C9: ③30来岁以后就好像生活规律特重要。

③30歳前後になると生活のリズムは何よりも重要な気がします。

② C8: 对,是这样

ソノトオリデス

C9: ④一周要去游2次泳。⑤别的无所谓。⑥什么都靠不住,真的。

④一週間に2回水泳に行くようになっていますよ。⑤他のことはどうでも良いですけど、

⑥体より重要なものはありません。本当ですよ。

③ C8: 嗯,是

ソウデスネ

上記事例は雑談の中でも相づちが比較的多く使用されているものであり、6つの文に対して計3回の相づちが打たれている。詳細を見ると、相づち①及び②はそれぞれC9の述べたこと(文②及び文③)に対して同感・賛成であることを表明しているものと考えられる。文④はC9の現在の生活習慣を述べているものであり、その後相づちは打たれていない。文⑤はまだ話が完全に終了していないため、文末に相づちが打たれていないと考えられる。文⑥の終了時点でC9の主張が判明したと思われるため、そこでC8が同感である表明として相づち③を打ったと解釈される。このように見ると、文末に相づちを打つか打たないかは話し手の発話内容に対して聞き手がどのように受け止めるかに大きく依存していることが窺われる。

事例2と事例3は、事例1と異なる場面の会話における相づちの使用例である。

〈事例2〉(会話C-イより)語学学院の学生応募期間について話している。

C1: ①如果去汉语学院的话,②他应该在9月,③应该在明年2月就赶快报名。

①もし「漢語学院」コースで学ぶのであれば、②9月には、③いや来年の2月には申し込みをしなくてはなりません。

④ C3: 明年2月份

来年の2月

C1: ④因为汉语学院也是9月,⑤是一年招一次生,⑥9月开学。

④というのは、「漢語学院」コースも九月に、⑤年に1回学生を募集しますから。⑥9月に始まります。

⑤ C3: 啊—

ア ソウデスカ

〈事例3〉(会話C-エより)依頼の内容を話している。

C6: ①再一个想求你,②比如有那么两个,③就是这样的,④要是能、能找到两个人的话,⑤帮我划一划圈子。

⑥嗯,就是想、想求你这个事。

①もう1つお願いしたいのは、②もし2人、どなたか2人ぐらい、③こういうことですよ、④心当たりの人がいれば、⑤アンケートに答えることを頼んでみていただけないかと思って、⑥うん、このことをお願いしたいのですが

⑥ C7: 噢。你这个、日语我自己帮你做肯定没问题……

ソウデスカ。日本語のものは、私が勿論できます……

上記2事例は、聞き手から見て重要な情報を獲得した、又はまとまった話が終了したと判断した時に相づちを

打ったと解釈される例である。事例2における相づち④と⑤は、それぞれ「漢語学院」の応募期間と開講時期を教えられた時に打たれたものであり、いずれも3つの文が終了してはじめてまとまった情報を獲得したとC3が判断した時に示した反応と思われる。そして、事例3における相づち⑥は、C6が6つの文で依頼の内容を完了した時に使用されている。最後まで聞かないとJ6の依頼したいことが完全に理解できないからであろう。

劉(1987)は、中国人の場合、相づちを打つ文末と打たない文末の分布については規則性が認められにくいとされている。しかし、上記3事例に対する分析結果から、文末に相づちを打つか打たないかは、話し手の発話内容に対する聞き手の受け止め方が関連し、聞き手によって話し手の話が内容上完結したと了解できた時点で相づちが打たれることが示唆されたと言える。

次の事例は「話を聞いている」という表明に用いられたと解釈されるケースである。

〈事例4〉(会話C-アより)短期クラス用教材の特徴について話している。

C1: 短期教材呢, 主要是配合旅游,
短期教材は主に旅行のためのものです。

⑦ C2: 啊

ハイ

C1: 配合这种短期生活用语,
中国に短期滞在の生活のために作ったものです。

⑧ C2: 嗯

ハイ

C1: 更多的强调的是听和说。
聞くことと話すことに重点を置いています。

⑨ C2: 嗯

ハイ

事例4においては、短期教材に関する説明の文末ごとに相づち(⑦~⑨)が打たれている。内容的に関連性がある一連の話を聞いている途中に使用されたこれらの相づちは、いずれも「話を聞いている」ということの表明と解釈される。

このように、中国語会話において、聞き手は話し手の話を聞いている過程において、発話内容に対してなんらかの態度を表明したい時、重要な情報または完全な情報を獲得したと判断したことを表明したい時、或いは話を聞いている姿勢を表明したい時に文末で相づちを打つ傾向があると言える。全会話資料においてこの傾向は会話参加者の人間関係や会話の場面と関係なく共通していた点も注目される。このことより、中国語会話における相づちのタイミングは話し手の発話内容及び話をしていくことにに対して聞き手がどのような見解や態度を持つかに関連していると考えられる。

3.2 日本語会話における相づちのタイミング

日本語の相づちのタイミングについて、劉(1987)はほとんど全ての文末ごとに相づちが打たれていると述べており、メイナード(1987:90)は「文の終わり、終助詞、間投助詞」に相づちがよく打たれていると指摘している。水谷(1988:8)は、「て」「けど」「から」などで終わるところや、「ね」が添えられるところに相づちが入りやすいという。これらの指摘は、日本語の相づちの先行発話は文末以外にも注目すべき複数の文法的形式が存在していることを示唆したと考えられる。そこで、本研究では相づちの打たれた箇所について相づちに先行する発話を文法項目別に分類した。更に、同じ形式のところに入れられた相づちの回数を数えて、その回数相づちの総数に占める割合を「文法項目別使用割合」として調べた^{iv}。表3は、最も割合が高い項目を個人別にまとめて示したものである。以下では、表3の項目を中心に分析を行う。

表3. 日本語会話における相づちの先行発話の文法項目別使用割合

資料番号	分析対象者	相づち の総数	(文末) 終止形	接続助詞	終助詞・ 間投助詞	格助詞	計
J-ア	J 2	51	17.6%	21.6%	12.2%	9.6%	61.0%
J-イ	J 3	48	20.8%	25.0%	18.8%	6.3%	70.9%
J-ウ	J 5	33	6.0%	12.1%	30.3%	15.2%	63.6%
J-エ	J 7	19	11.6%	12.4%	31.6%	7.3%	62.9%
J-オ	J 8	51	3.9%	21.6%	25.5%	9.8%	60.8%
	J 9	27	6.9%	16.4%	33.1%	3.1%	59.5%

表3より日本語会話における相づちの先行発話の59.5%～70.9%が(文末)終止形^vを含む複数の異なる文法形式の後に散らばっていることが分かる^{vi}。更に詳細について見ると、接続助詞(「て」「ので」「から」等)、終助詞・間投助詞(「ね」「けれども」等)に後続する相づちの割合がどの会話においても比較的高く、全員12%以上となっている。この結果は、日本語会話において相づちを打ちやすい文法形式が存在しているという先行研究の指摘を裏付けている。一方で、表3より下記2つの傾向が窺われる。

会話J-ア及びJ-イにおいては、(文末)終止形に打たれた相づちが相づちの総数に占める割合(それぞれ17.6%、20.8%)が他の2場面の4名(3.9%～11.6%)より相当高くなっている。

〈事例5〉(会話J-アより)授業には毎日のように来られない受講者に相応しいコースを紹介している。

J1: そういう方でえーそうですね、週3日というふうなコースも
特別ですけども、

⑩ J2: ハイ

J1: あのう、ございます

⑪ J2: ハイ

J1: ただその場合もその方達だけでコースを組んでいるわけではなくて、

⑫ J2: エー

J1: 一応こういう毎日やっている方たちと一緒にあって、

⑬ J2: ハイ

J1: あのう、やるような形になるんですね、

⑭ J2: ハイ

上記事例で、相づち⑩は文末に用いられている助動詞「ます」の終止形に打たれている。会話J-ア及びJ-イでは、事例5で示されているように、平均して約5回に1回という割合で相づちが(文末)終止形に打たれている。J-ア及びJ-イにおける(文末)終止形に打たれる相づちの割合が高いのは、初対面同士によるフォーマルな場面での会話であるため、「です」「ます」の「終止形」で文を終了するケースが他の会話より多いことを反映した結果と考えられる。

また、会話J-ウ～J-オでは、終助詞・間投助詞に後続する相づちが相づちの総数に占める割合(25.5%～33.1%)が非常に高くなっており、会話J-ア及びJ-イにおける同割合(それぞれ12.2、18.8%)を大きく上回っている。先行発話に用いられる終助詞・間投助詞の詳細については、事例6に示されている「ね」「けど」の他に、事例7、事例8に示されているように女性や親しい者同士の間で使用される「の」「さ」(その他に「わ」)も数回観察されている。

〈事例6〉(会話J-エより)ワーブ原稿について話している。

J6: それをね、↑

⑮ J7: エエ

J6: あのほかの学校は「こんな企画をしてみましたみたい」のもちょっといれてー、

⑯ J7: エエエ

J6: 自分の興味があるものでまるにしたほうがいいかなって一瞬思ったんだけど、

⑰ J7: アホント ウンウンウン

〈事例7〉(会話J-オより) 自分の子供との会話内容を相手に話している。

J9: 「テスト前 ××勉強するの?」と言ったらさ

⑱ J8: @@@

〈事例8〉同事例7

J8: うんだからねえ、お母さんテスト前だから×××とか言ってたの

⑲ J9: ウンウンウン

これらの終助詞・間投助詞が会話ウ～オにおいて先行発話に比較的多く現われている理由は、この3つの会話は知人同士または友人同士によるインフォーマルなものであるためと考えられる。会話参加者の人間関係及び会話場面が相づちの先行発話の形式、つまりタイミングに影響を及ぼしている表れと見て良いだろう。

4. 結果の考察

この節では前節で示した各言語の相づちの特徴を比較し、両者の相違点について考察を試みる。

相づちのタイミングにおける中日の相違点は次のようにまとめられる。

- ① 中国語の相づちは主に文末において使用されており、そのタイミングは先行発話の内容に対する聞き手の態度と密接に関連している。
- ② 他方、日本語の相づちは定型的な複数の形式に呼応して打つ性質を有する。相づちが呼応する先行発話の形式は会話参加者の人間関係や会話場面(フォーマル/インフォーマル)に左右され、相づちのタイミングに変化をもたらす。

このような特徴と相違点が生じた要因について、以下では言語構造の特徴と相づち使用に関する意識の両面から検討する。

まず、日本語は言語自身の構造上の特徴により、相づちを打ちやすいコンテキストⁱⁱⁱが比較的多く作られていると言える。終止形で終わる文末ⁱⁱⁱの他に、例えば「ね」や「けれども」などの終助詞・間投助詞、「て」や「ので」「から」などの接続助詞、格助詞等の後にも聞き手の相づちが多く対応している。なお、本稿では詳細な分析を行っていないが、事例の記載に「、」で示しているポーズがこれらの形式に伴われることが多いことも相づちの打ちやすい大きな要因と考えられる。また、普通体と丁寧体、終助詞における男性語と女性語の違いもあるため、会話相手との関係や会話場面の性質によって、発話形式、つまり相づちのタイミングには変化が生じる。

一方、中国語の文は個々の独立した意味を持つ単語によって構成され、文法関係は日本語のように各種の助詞によって示されるのではなく、文全体の中の相対的な位置によって示される。事例のように、一つの文の途中でポーズが置かれることが少なく、文と文の間に比較的長いポーズが置かれる場合が多い。よって、中国語には、相づちを入れて良いという明確な構文上のコンテキストが日本語のように明確でないと言える。むしろ、聞き手があるまとまった意味の話を聞いたと判断した時に(通常は文末)相づちが打たれることが多い。また、言葉の使い方としては、会話場面、性別、上下関係、親疎関係等による文体や文法形式の違いが少ないため、相づちの主なタイミングとなる文末もそれらによる差異がないことが考えられる。

次に、相づちを使用する言語話者の意識上の違いが考えられる。日本人は会話をする時、話し手側に相づちを求める意識があると言われている。この意識について水谷(1988:7)は「聞き手は頻繁に相づちをうち、話し手は相づちを待って次へ進む」と述べている。また、杉藤(1989:349-350)では「あいづち、うなずき等が、話者の句切りの意図に対応して挿入される」と書かれている。これらの指摘は、日本語の会話における相づちを打つ行為は、会話参加者双方による協働作業の性質を持っていることを表していると言える。つまり、日本語の会話において、話し手側の発話に出てくる「ね」「けれども」「て」といった文法形式、または伸ばして発音されたり、上昇イントネーションで発音されたりした言葉などは、話し手側が発した、相づちを打ってほしいという表明と考えられる。言い換えれば、話し手は相づちを打ちやすい環境を意図的に提供しているとも言える。そのような

相づちを要求しているという心理に応じて、話し手によって作られる相づちの打ちやすい環境（文法的、音声的な形式）に呼応して、聞き手側も積極的に相づちを入れ、このような手段で会話のリズムを保っていき、更に会話を進めていくと考えられる。それに対して、中国語会話においてはこのようなルールがないと言って良い。人が話をしている時なるべく声を出さずに静かに聞くほうが良いという考えを持つ人が多数いれば（楊 2000）、話し手の話から自分の知りたい情報を獲得したら相づちを打つと考えている中国人も大勢いる（楊 2006）。このような事情から、比較的ポーズが大きく置かれる文末にならないと相づちを余り打たないこと、また文末に対して、話し手の発話内容になんらかの態度を表明したい時や発話内容からまとまった情報を獲得したと判断した時に打つことが多くなっている。相づちは先行発話の文法形式に対してというより、発話内容に対して使用される性質を持っているため、相づちを打つか否か又はどこで打つかという行為は日本語に比べて比較的任意なものを受け取られる。このような意識や習慣及び構造上の特徴が、中国語の相づちが文末に集中し、発話内容に最も大きく関連しており、また会話場面や会話参加者等による影響を受けない結果をもたらしたと解釈できる。

5. おわりに

本研究は、異なる場面での会話における相づちの先行発話の分析を通して、これまで明確にされていなかった中日両言語のタイミングの相違を明らかにし、更に相違の要因について考察を加えた。

両言語間の相づちのタイミングの特徴や違いより、定められた形式に呼応して相づちを打つ習慣を持つ日本語母語話者が、発話内容によって文末に臨機応変に相づちを打つ中国語母語話者と接触した場合、コミュニケーションを円滑に進めることが難しいことが予測される。日本語母語話者は、中国語で会話をする時に、相手の発話から相づちを打って良い文法形式等を探そうと試みるが、中国語には日本語のように相づちを打つ適切なタイミングが見つからず、困惑してしまうことが考えられる。一方、中国語母語話者が日本語で会話をする際、母語の習慣に則って、話し手の発話内容により相づち使用の必要の有無を判断することが予測される。これは、冒頭で述べた中国人学習者の相づちのタイミングが日本語母語話者と異なる原因の一つとも考えられる。

本研究で明らかになった結果は、中日の接触場面における相互理解に示唆を与えるものと考えられる。

本研究の結果と先行研究の知見を踏まえ、中日両言語の教育現場における相づちのタイミングに関する指導法を提言したい。

日本人中国語学習者に対しては、話し手の話の内容に応じて文末に相づちを打つように練習させる。中国人日本語学習者に対しては次のような3つのステップで相づちの打ち方や会話の進め方を習得させる：1) 日本語の相づちが定型的な複数の形式に呼応して多く使用されることや、会話場面及び会話参加者の人間関係により、それらの形式が一定の変化をすることについて意識的な観察をする。2) 会話中、一つの文が終了した時のみならず、話し手の発話に「ね」「けれども」「ので」「て」などのような形式が使われ、特にポーズや特徴的なイントネーションが伴われた時に相づちを打つように練習を行う。3) 自然な日本語の話し方を身につけるために、会話をする際に、一つの文を一気に言い終えるのではなく、接続助詞や終助詞・間投助詞をつけて、短いポーズを置きながら言う練習を行う。以上のようにして、中国人日本語学習者もタイミングよく相づちを打ち、更に会話相手に相づちを打つ機会を作ることができるようになることが期待される。

本研究の分析データとなった会話は、全て女性同士によるものである。男性同士の会話や男女間の会話を分析し、タイミングにおける男女差や会話相手の性別による差異を調べることを今後の課題としたい。

注

- i J-エを除いた会話については、会話開始部を除いて、実質の会話に入ってから約4分間を分析データとした。J-エについては、採集した会話の長さが約3分であり、会話の開始部と終結部を除いて約2.5分を分析データとして取り上げている。
- ii 本研究は、メイナード(1993)、塚原/ワード(1997)を参考にして、次のように相づちに定義をする。「会話参加者の一方が発話権を行使している間に、または発話権を終了した直後に、他の参加者がその会話参加者の発話に対して送る談話形成機能を持った、次の2つの性質を持つ(非言語的形式を含む)短い表現及びこれらの表現への反応として送られるものを相づちとみなす。(1) その会話

- 参加者はそれに回答する必要がない、(2) その会話参加者が回答を要求しているわけでもない。」
- iii 本論では次のようなものを中国語の「文」として取り扱う。「相対的にまとまった意味を有し、一定の語調を持ち、前後にやや大きなポーズをおく言語単位である。(中略)長いものも短いものもあり、最短の文は単語一つで成り立っている。」(中山時子他 1988『新しい中国語語法』東方書店 p.10 より)
- iv 「活用」による語形変化を持つ動詞、形容詞、形容動詞、助動詞については、同一項目にまとめて調べた。
- v ここでは、文末に使われている動詞、形容詞、形容動詞、助動詞に限定する。接続助詞または終助詞等が後続されるものは除外する。
- vi 表3の項目の他に、「名詞」「連体形」「(文中)終止形」「係助詞」「副詞」「感動詞」(後者の2項目については、会話資料の中で主に相づち詞として使用されている。)等があり、これらの項目の合計が各分析対象者の相づちの総数のうち約30%~40%を占めている。
- vii メイナード(1987:90)では、相づちが使用される直前の形式を「談話上のコンテクスト」と呼ぶ。
- viii 日本語は、「て」「ので」等の接続助詞または「けれども」「ね」等の終助詞・間投助詞で終わる文の多くは、「文が終了した」とされているが、本研究では、先行発話の文法的形式に着目して分析を行うため、それらの形式で終わる文については、あえて終止形と区別して分類した。

参考文献

- (1) 泉子・K・メイナード(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『言語』16-12,88-92
- (2) 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- (3) 今石幸子(1994)「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学日本学報』1994-13,107-120
- (4) 黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150,122-109
- (5) 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所報告92,62-106 三省堂
- (6) 杉藤美代子(1989)「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育』3,343-364 明治書院
- (7) 杉藤美代子(1993)「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』12,4,11-20
- (8) 塚原渉/ワード・ナイジェル(1997)「理解を介さない会話現象としてのあいづち」『月刊言語』26-10,90-97
- (9) 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- (10) 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』7-13,59-65
- (11) 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7-13,4-11
- (12) 楊晶(1997)「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態・頻度・タイミングを中心に—」『言語文化と日本語教育』13,117-128 日本言語文化学会
- (13) 楊晶(2000)「相づちに関する意識の中日比較—アンケート調査の結果より—」『人間文化論叢』3,87-100 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- (14) 楊晶(2006)「相づちの中日対照研究—使用場所という観点から—」お茶の水女子大学日本言語文化学会第32回研究発表要旨『言語文化と日本語教育』32,101-104 日本言語文化学会
- (15) 劉建華(1987)「電話でのアイズチ頻度の中日比較」『月刊言語』16-21,93-97
- (16) 邵敬敏主編(2001)《現代汉语通論》上海教育出版社
- (17) 严辰松/高航(2005)《語用学》上海外语教育出版社
- (18) 左思民(2002)《汉语語用学》河南人民出版社
- (19) Clancy, P. M. Sandra, A. Thompson, Ryoko Suzuki & Hongying Tao (1996 "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin" *Journal of Pragmatics* 26, 355 - 387
- (20) Watanabe, S. (1993) "Cultural differences in framing. American and Japanese group discussions" In D. Tannen (Ed.) *Framing in Discourse*, Oxford University Press 176-209

(2007年1月12日受理)